九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 新ストループ検査IIで測定したストループ・逆ストループ干渉の特徴

松本，亜紀

https://doi.org/10.15017/1931991

出版情報：九州大学，2017，博士（心理学），論文博士
バージョン：
権利関係：

| 氏　　名 | 松　本　亜　紀 |
| --- | --- |
| 論　文　名 | 新ストループ検査IIで測定したストループ・逆ストループ干渉の特徴 |
| 論文調査委員 | 主査　九州大学　教授　中　村　知　靖<br>副査　九州大学　教授　黒　木　俊　秀<br>副査　九州大学　准教授　光　藤　宏　行<br>副査　京都女子大学　教授　箱　田　裕　司 |

# 論文審査の結果の要旨

本論文は，マッチング反応を利用することでストループ・逆ストループ干渉の比較が可能である新ストループ検査 II を用い，課題条件，発達・加齢，運動が両干渉に及ぼす影響を明らかにしたものである。研究１では，課題実施順序ならびに反応様式を操作した実験を行い，課題実施順序によるストループ・逆ストループ干渉率に違いはなく，反応様式に関しては，口頭反応ではストループ干渉のみが生起し，マッチング反応では両干渉が安定して生起することを明らかにした。研究２では，年齢が７歳から 89 歳までの 2,146 名を対象に新ストループ検査 II を実施し，ストループ干渉と逆ストループ干渉が異なる生涯発達変化パターンを示すことを明らかにした。次に，日本語を母語とし特別な英語学習経験のない実験参加者に英語版ならびに日本語版新ストループ検査 II を実施し，言語習熟度の低い英語版の方が言語習熟度の高い日本語版よりも両干渉率が高いことを示した。さらに高齢者水晶体疑似メガネを利用し，色覚低下に伴いストループ・逆ストループ干渉ともに干渉率が増大することを明らかにした。言語習熟度と色覚を操作した実験から，新ストループ検査IIにおいて色覚あるいは言語情報のいずれかの処理が低下すると両干渉率が増加することを明らかにした。研究３では，激しい運動であるラクビーを行った群と統制条件である座学講義受講群に対して運動等実施前後に新ストループ検査IIを実施し，激しい運動がストループ干渉のみを減少させる可能性を示した。上記で示したように，本論文は，新ストループ検査 II における課題条件，発達・加齢，運動が両干渉に与える影響を詳細に明らかにしており，認知心理学の領域に新たな知見をもたらし，学問発展に寄与する研究である。よって，本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。